

芦屋大学論叢 第81号
(令和6年3月25日)抜刷

《研究ノート》

日本におけるバレー教師教育の必要性について(2)

ー芦屋大学バレー教師課程ディプロマコース受講者の推移とアンケート調査ー

井 村 薫 子
伊 藤 真 央
藤 本 光 司

《研究ノート》

日本におけるバレエ教師教育の必要性について(2)

－芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコース受講者の推移とアンケート調査－

井村 薫子(1)

伊藤 真央(2)

藤本 光司(1)

(1) 芦屋大学経営教育学部

(2) 芦屋大学大学院教育学研究科修士課程

1. はじめに

2017年刊行の本論叢第68号において、日本におけるバレエ教師教育の必要性を明らかにした。日本ではバレエは子どものお稽古事、あるいは習い事として定着しているものの、ごく一部の課程を有する大学や専門学校を除くと、国内の学校で学ぶバレエ教師教育は数少ない。多くの場合、バレエを習い踊った経験のある個人が教室を開き、その個人の習った方法や選んだ方法でバレエを教えている場合が多い。つまり、日本においては規模もメソッドも様々である。

国内のバレエ教室は、海外のバレエ団やバレエ学校に匹敵する規模のものもあれば、カルチャーセンターの講座として、あるいは市民会館や公民館などを借りて個人的に運営する人など様々である。また、私設の小規模バレエ教室の経営は、自分の不動産を活用して経営している場合が多く、大規模にビジネスとして経営している団体は数少ない。

バレエ教育は、当該当局の無い分野なので、業界団体は存在するものの届け出義務はなく、監督・指導も受けることはない。故にバレエを習う生徒の年齢や数、環境、教授法などの実態を全国レベルで把握することは不可能である。

教師自身も様々な背景から輩出されているため、ほとんどの場合は教育者としての教習は受けておらず、免許も必要とせず外部から審査されることもない。生徒や保護者達はバレエの教師を選ぶ際に確かな基準もないまま、教授内容というより自分たちの利便性や知名度で教室を選んでいるように見受けられる。

教授内容は、指導要領のようなものを持たず、即興的な側面、器用さ、反復練習に特化しており、年齢による計画性や段階的なアプローチもあまり見られない。発表会の成功やコンクールの賞が到達目標として挙げられ、そのためには多くの時間と労力、費用を費やし、休暇や勉強のための時間、そして時には健康でさえも犠牲となる。一方、バレエの芸術的側面についての教育は関心が薄く、時間も割かれていない場合が多いと考えられる。音楽面でも最近では色々なCDが入手可能となったため、同じ曲で何年も稽古をすることは少なくなったが、やはり生ピアノの伴奏でのレッスンは経済的・人材的・物理的にも困難な教室が多い。当然踊り手の「耳」の教育は手薄となる。

これらの日本バレエ教育の現状を目の当たりにし、今後の日本バレエ界の発展のためにはバレエ教師教育が必要と考え2014年「芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコース」を開設した。

2. ディプロマコースの変遷

2014年に開校したディプロマコースは、今日までに延べ49名の修了生を輩出してきた。(第7期生は現在、進行形である。)2021年からのコロナ禍の影響を受け、本コースも不開講の年度もあったが、今日までの入学者の実績・推移を以下にまとめる。

開講年度にあたる2014年が最多受講者数となっているが、平均して8.4名の受講者数がおり、その年齢層は実にさまざまである。内部受講生がいるため、全体の平均年齢は28.65歳となっているが、外部生のみでの平均年齢は38.4歳である。また本コースは2年間の通信制のコースとしており、入学者も日本全国から集まっている。表1に入学者の内訳や平均年齢などの詳細を示す。

表1：入学者の内訳と平均年齢

入学年次	入学者数	内 訳	退学者	平均年齢
第1期生(2014)	15名	外部生：8名／内部生：7名	1名	28.06歳
第2期生(2015)	4名	外部生：3名／内部生：1名		35.75歳
第3期生(2016)	7名	外部生：3名／内部生：4名	1名	27.57歳
第4期生(2017)	5名	外部生：5名／内部生：-名		34.2歳
第5期生(2018)	9名	外部生：7名／内部生：2名		35.66歳
第6期生(2019)	12名	外部生：4名／内部生：8名	1名	20.45歳
第7期生(2022)	7名	外部生：6名／内部生：2名	2名	26.85歳
合 計	59名	外部生：36名／内部生：24名	5名	28.65歳

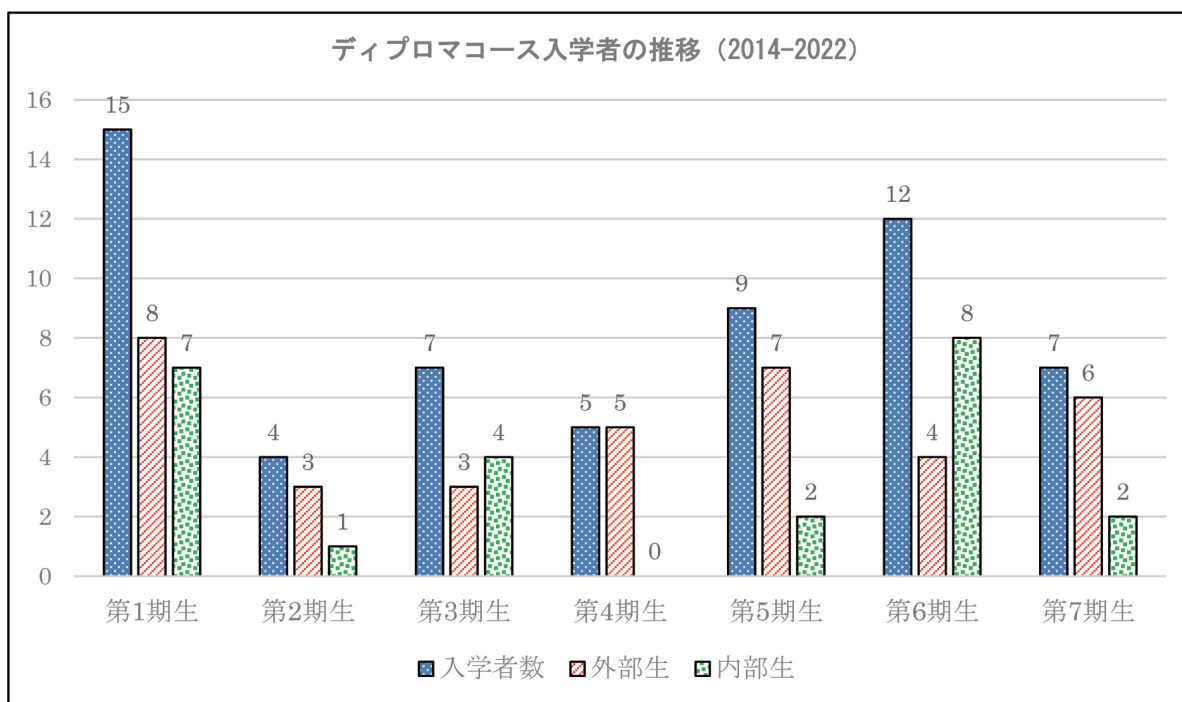


図1：ディプロマコース入学者の推移

3. アンケート調査

3.1 芦屋大学教師課程ディプロマコースの概要

芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースは、以下(1)～(3)のような様々なニーズに応えることが可能なプログラムとして設定している。

- (1) 芦屋大学バレエコース在学学生にとって、バレエ教師として就職するための教職課程である。
- (2) 既にバレエ教授の職業に従事している教師にとっては、自らの研鑽とキャリアアップのための研修である。
- (3) バレエを勉強しているが、バレエ教授以外の職業に従事している成人については、キャリア開発のための過程である。

年4回、各3日間の集中講義期間がある。各集中講義が終わると、通信制の授業として各科目の課題に取り組む。この通信制の流れは、「仮提出」→「添削」→「修正」→「本提出」である。

本コースのカリキュラムは大きく分けて(1)教授法的側面、(2)芸術教育的側面、(3)教室経営的側面にて構成されている。それぞれの項目の内容については、前報の「日本におけるバレエ教師教育の必要性について(1)」に明記した。本稿では、受講者に行ったカリキュラム等に関する第1次のアンケート調査内容を報告する。

3.2 アンケートについて

対象者：ディプロマコース修了生（ディプロマ取得者）

期 間：2023年12月末～継続中

回答数：8件（2024年1月25日現在）

アンケート開始時期が、当初の予定より遅延してしまい、現時点での回答数も少ないので、今後の受講生についても継続して調査していく予定である。

本アンケートでは以下の質問について、それぞれ「1：全くそう思わない」～「5：非常にそう思う」の5件法で選択する形式とした。質問枝を表2に示す。

表2：アンケート調査の質問枝

- (1) カリキュラムの科目の種類は十分でしたか？
- (2) 講義の内容は満足のいくものでしたか？
- (3) 課題の内容は満足のいくものでしたか？
- (4) 知りたい内容が含まれていましたか？
- (5) このコースを経てバレエの技術に関して新しい発見がありましたか？
- (6) このコースを経てバレエの技術に関して新しい発見がありましたか？
- (7) このコースを経てバックグラウンド（演劇・歴史など）に関して新しい発見がありましたか？
- (8) このコースを経て付随すること（アーツマネジメントなど）に関して新しい発見がありましたか？
- (9) 教えの現場で、指導の方法や仕方が変わりましたか？
- (10) このコースで勉強したバレエの技術的な内容が実践の教えに役立ちましたか？
- (11) バレエ教授理論及び指導法は役に立ちましたか？どのように役立ちましたか？
- (12) バレエのための解剖学は役立ちましたか？どのように役立ちましたか？
- (13) このコースで学ばれた指導法を、実際に研修期間中に実践した結果の具体的な例を書いて下さい。
- (14) 心理学の講義内容や情報は役に立ちましたか？どのように役立ちましたか？
- (15) 経営・アーツマネジメントの講義内容や情報は役に立ちましたか？どのように役立ちましたか？
- (16) 論文・レポートの書き方などに関する研修内容は役に立ちましたか？どのように役立ちましたか？

3.3 アンケート結果について

今回のアンケート調査で得た自由記述の結果を整理した。

(11) バレエ教授理論及び指導法は役に立ちましたか？どのように役立ちましたか？という問いに対し以下の回答が得られた。

- ・何歳の時期に何を練習させるか、どんなことができるのかが知れた。
- ・段階を踏んで教えていくことが役に立ちました
- ・自信をもって伝えられるようになりました。また注意の際の言葉も増えたと思います
- ・ディプロマ卒業後、指導者ではなく、現在も生徒の立場であるが、自己がレッスンを受ける際に学んだことをフィードバックするよう努め、技術習得効率が若干向上していると感じる。
- ・生徒への分かりやすい伝え方や、自分がレッスンする上でもパの意味を理解しながらレッスン出来るようになった。

以上の自由記述を、テキストマイニングの分析手法によって整理した。

図2に示したスコア順分析結果では、ディプロマに対して、伝え方やレッスン内容が有用であったようである。一方、図3に示した出現頻度順の分析では、レッスンに対して指導者意識や習得内容に関連した回答が見られた。

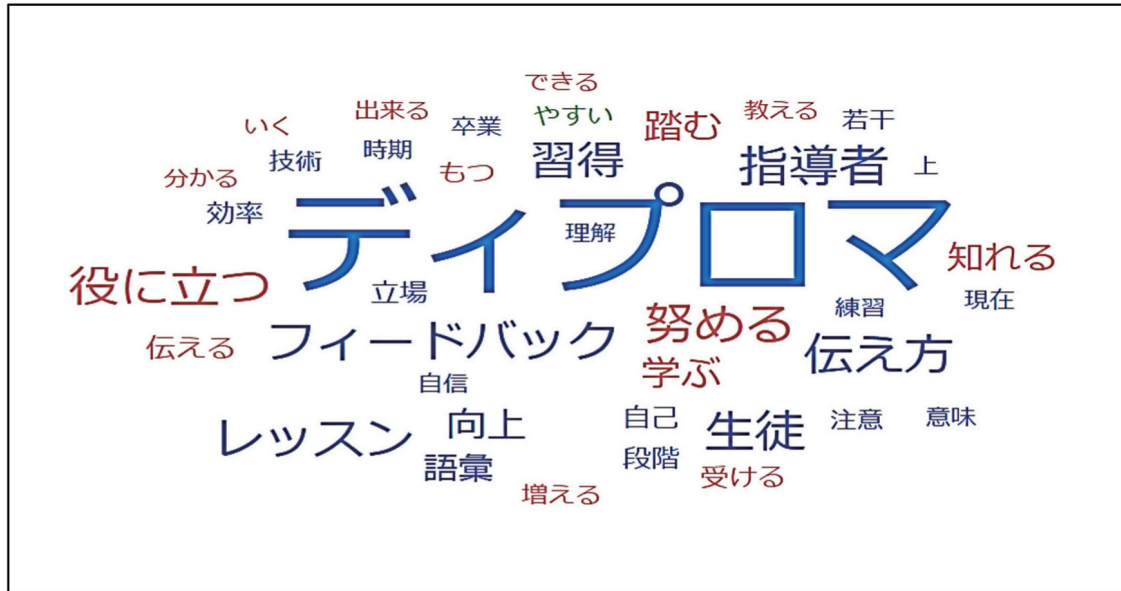


図2：テキストマイニングによるスコア順分析結果

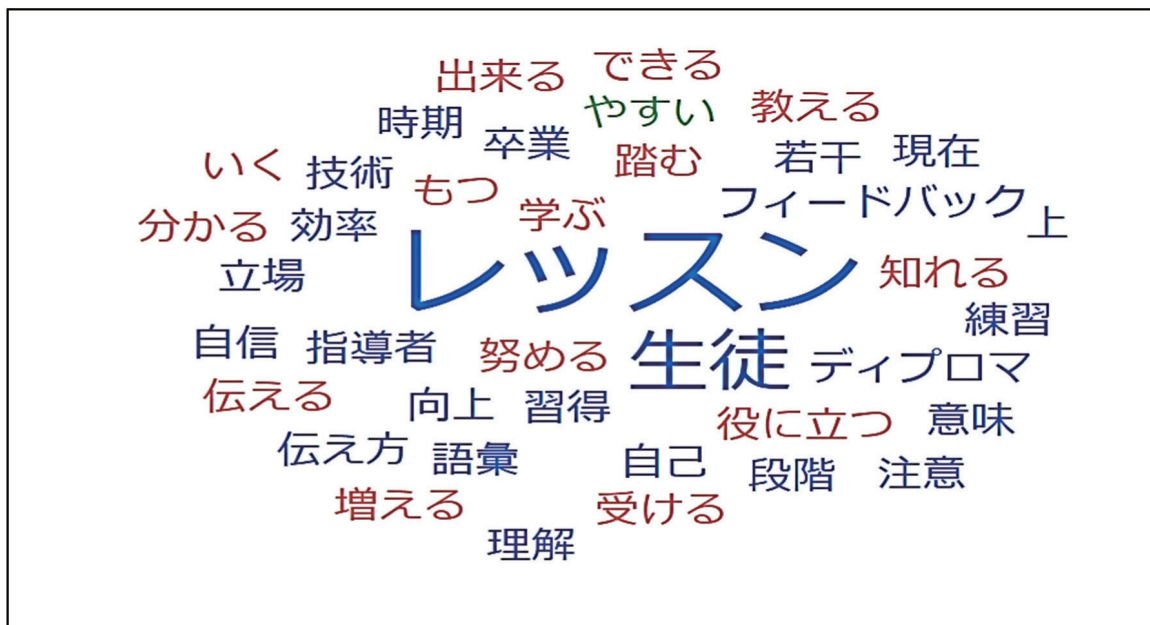


図3：テキストマイニングによる出現頻度順の分析結果

続いて、(15)経営・アーツマネジメントの講義内容や情報は役に立ちましたか？どのように役立ちましたか？という問いに関して、以下の回答が得られた。

- ・まだ経営に携わっていないためわかりません。
- ・劇場付のバレエ団は数少ないと思いました。
- ・今まで企画運営は経験してきたが、きちんとしたビジョンを持って運営できるようになりました。
- ・発表会をする上で講義内容を見返して何が必要で準備すべきか理解できた。

といった結果が得られた。

4. おわりに

本稿では、主にディプロマコース受講者の内訳と平均年齢、入学者の推移等を明らかにした。そして、本コースの修了生に、カリキュラムに関するアンケート調査を実施している経過を報告した。

本コースの主幹である教授法的側面に関するアンケートの自由記述では、教育方法や指導者としてのスキルが向上し、生徒とのコミュニケーションや理解力が深まっていることが明らかとなった。

また本学経営教育学部に属するバレエコースとの繋がりもあるが、経営的側面に関するアンケートの自由記述では、経営にはまだ経験がないが、劇場併設のバレエ団の希少性に気づくことができた。また企画運営経験を活かし、より具体的なビジョンを持って運営できるようになった。発表会の準備では講義内容を振り返り、必要な準備が理解できた等の意見があり、これまで手探りで運営・経営していた部分が、本コースを経てはっきりとしたビジョンが持てるようになったと見受けられる。

このアンケート調査は今後も継続していき、引き続き本コースの見直し・充実のために活用していきたいと考えている。

参考文献

- 1) 海野敏, 高橋あゆみ, 小山久美:「日本のバレエ教育機関における教師の現状と課題—『バレエ教育に関する全国調査』に基づく考察」, 舞踊学 第35号, pp.13-22, 2012.
- 2) 海野敏, 高橋あゆみ, 小山久美:「バレエ教育に関する大規模調査の収集・整理, バレエ教育現場との連携による日本におけるバレエ教育システムに関する研究」, pp.21-70, 学校法人 東成学園 昭和音楽大学バレエ研究所, 2013.
- 3) 海野敏, 高橋あゆみ, 小山久美:「日本のバレエ学習人口とバレエ参加率に関する大規模社会調査の比較分析」, 東洋大学社会学部紀要 50(1), pp.-65, 2012.
- 4) 佐藤節子, 佐藤伊都美:「ヨガ、ピラティスおよびバレエ・エクササイズの実験が短大生の心身の健康に与える効果」, 埼玉女子短期大学研究紀要 21, pp.53-72, 2010.
- 5) 新本惣一郎:「小学生のスポーツ実施状況の違いが特性的自己効力感に及ぼす影響」, 発育発達研究 57, 広島大学大学院総合科学研究科, 2012.
- 6) 菅沼麻理子, 岸俊行, 野島栄一郎:「クラシックバレエを題材とした初心者への内的意識の変化に関する検討」, パーソナリティ研究 16(2), pp.220-228, 日本パーソナリティ心理学会, 2008.
- 7) 稲田奈緒美:「日本バレエの創世期を語る—日本におけるバレエ教育の成立と変遷」, バレエ教育現場との連携による日本におけるバレエ教育システムに関する研究, pp.331-345, 学校法人 東成学園 昭和音楽大学バレエ研究所, 2013.
- 8) 市瀬陽子:「バレエ指導者資格に関する研究—フランスの事例から、バレエ教育現場との連携による日本におけるバレエ教育システムに関する研究」, pp.252-261, 学校法人 東成学園 昭和音楽大学バレエ研究所, 2013.

- 9) 昭和音楽大学バレエ研究所国際交流研究グループ：「世界のバレエ学校シリーズ～第1回 英国ロイヤル・バレエ・スクール、バレエ教育現場との連携による日本におけるバレエ教育システムに関する研究」, pp.177-203, 学校法人 東成学園 昭和音楽大学バレエ研究所, 2013.
- 10) 大岡直美：「Royal Academy of Dance の新シラバスについて—Vocational Graded Examinations in Dance の新 Intermediate Foundation シラバスについての—考察, バレエ教育現場との連携による日本におけるバレエ教育システムに関する研究」, pp.284-292, 学校法人 東成学園 昭和音楽大学バレエ研究所, 2013.
- 11) 井村薫子、新谷佳冬：「日本におけるバレエ教師教育の必要性について (1) 芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースの試み」 芦屋大学論叢 2017.
- 12) 倉田梓、平山素子、「日本のバレエ教育現場への一貫性プログラム導入にまつわる問題点ワガノワ・メソッドを経験したダンサーの声を手がかりに」 2013、舞踊學.
- 13) 倉田梓、「日本のバレエ教育における指導者資格に関する一考察」 2015、関東学園大学紀要.

Abstract

In this essay No. 68 published in 2017, we clarified the need for ballet teacher education in Japan. The diploma course, which was launched at Ashiya University in 2014, has produced a total of 49 graduates to date. (The 7th cohort is currently in progress.) Due to the impact of the Corona disaster from 2021, this course was not offered in some years, but we will summarize the results and trends of enrollment to date.

In addition, we will report the contents of the first questionnaire survey on the curriculum conducted by the participants. The questionnaire survey is ongoing, but in this paper, the free descriptions are organized by the analysis method of text mining. According to the results of the score-order analysis, it seems that the method of communication and the content of the lesson were useful for the diploma. On the other hand, in the analysis in order of frequency of occurrence, responses related to the lesson were related to the sense of leadership and the content of learning.

